

第140回くらしの植物苑観察会 2010年11月27日(土)

文芸作品に見る菊見

平野 恵(さいたま市大宮盆栽美術館)

1. 江戸文芸と菊見

近世後期の文芸作品には、菊花を題材にした作品は多い。菊細工は、秋のイベントであり、江戸市中の人々は、菊花を見て狂歌を詠むことを盛んに行い、菊見に興じていた。

花を見る 後ろ姿の美しや 菊と人とをながめくらべん

こうした狂歌と菊細工が印刷物として配布され、それを目にした人々もまた菊見に行くという、宣伝効果をもたらした。

2. 明治文学と菊見

明治20年代の東京団子坂は、秋の菊見の名所として定着し、これを見物に行く人々の姿もまた、秋の風物詩として欠かせないものになっていった。

明治時代の文学者は、こうした菊見にまつわる情景を見逃さずに、作品に活かしてゆく。

ひぐちいちよう  
樋口一葉

美登利は障子の中ながら硝子ごしに遠く眺めて、あれ誰れか鼻緒を切った人がある、母さん切れを遣つても宜う御座んすかと尋ねて、針箱の引出しから友仙ちりめんの切れ端をつかみ出し、庭下駄はくも鈍かしきやうに、馳せ出で、椽先の洋傘さすより早く、庭石の上を伝ふて急ぎ足に來たりぬ。

(中略) 此処に裂れが御座んす、此裂でおすげなされと呼かくる事もせず、これも立尽して降雨袖に侘しきを、厭ひもあへず小隠れて覗ひしが、さりとも知らぬ母の親はるかに声を懸けて(中略)呼立てられるに、はい今行ますと大きく言ひて、其声信如に聞えしを恥かしく、胸はわくわくと上気して、何うでも明けられぬ門の際にさりとも見過しがたき難義をさまの思案尽して、格子の間より手に持つ裂れを物いはず投げ出せば、見ぬやうに見て知らず顔を信如のつくるに、ゑゝ例の通りの心根と遣る瀬なき思ひを眼に集めて、少し涕の恨み顔、何を憎んで其やうに無情そぶりは見せらるゝ、(後略) (『たけくらべ』明治29年・1896)

向ヶ丘弥生町の坂にて、若き書生のまだ十七八なると十四計なると、菊の鉢植をわら縄にて結びて下て來たりしに、其縄切れて行なやみたればおのれがしめたる絹紐取てあたえんとしたる事、其折來かゝりたる大学の生徒のあやしげに見たる事、其書生が振舞の事、西片町にて別れし事。(『樋口一葉日記』明治24年(1896)11月8日)

一葉は、東京大学近くの弥生町の坂で、書生が菊の鉢植を運ぶための縄が切れているのに遭遇し、絹紐を与えた。この出来事が、『たけくらべ』の有名な場面で、鼻緒を上げるための縮緬の布を主人公、美登利が信如になかなか手渡せない、恋心をあらわす重要な小道具として活かされている。

あえぼこうそん  
饗庭篁村

団子坂の中ほどにて出逢ひし一群は、稗田登作が病氣全快の喜びを兼ねて、悴娘の知己朋友を伴ひての菊見にて、殿木守一も此中に在しが、物狂はしき女の顔を、つく見れば我母なり、我母ならぬ乳の恩、懐しかりし人なれば、是はと思ひて転びたる、お幾を引起し何として、斯く乱心になり玉ひしと労はるに、連の人々不思議を立て、君は此婆さんを知つて居るのか、それなら此人の家まで、車で送らせてやツたら宜からうと詞を添へるに(後略) (『作り菊』『饗庭篁村全集』昭和3年・1928)

我が子を探し尋ねて乱心した母を、数十年ぶりに成長した息子が、団子坂の途中で見つける場面。市中の人々が挙って菊見に出掛ける、秋の団子坂ならではの情景が、文学作品の舞台として選ばれた一例である。

### 3. 女性と菊見

秋の風物詩として菊見が一般化すると、菊花のあでやかさに負けず劣らず、女性たちが華やかな衣装をまとい、着飾って出かける風潮が盛んになった。

令姫たち、花をかざりて今日を晴と出たちたるいと罪なしかし。上をよそふて花見哉と故人のさとりをかしかれど、猶うるはしきはうるはしきもの也。(『樋口一葉日記』明治26年[1898]2月26日)

万憂をすて、市井のちりにまじはらむとおもひたちける身に、花紅葉何のうるはしき衣かきるべき。よしこれにて十金也とも十五金也とも得しほどをももてと手とせむ。これをうしなはざかれにつくべきのみとて成けり。(『樋口一葉日記』同年7月7日)

一葉は、明治26年(1898)、「美しいものは美しい」として、一旦は花見に出掛ける女性の粧いをよしとする。しかし、同じ年の7月には、「美しい着物が何の必要があろう」として、自らが市井に埋もれ文学を捨てる決意を固めるために着物を売ることにする。

明治22年(1889)成立の右図の表題には、「観菊」とあるが、見てわかるとおり、真の画題は菊を背景にした美人である。美人があでやかな衣装で粧うことが、当人だけでなく、これを見る男性たちの楽しみにもなっていた。



「東京団子坂観菊之図」個人蔵

### 4. 文学の功罪

おかもと きどう  
岡本綺堂 『半七捕物帳』「菊人形の昔」

…いったい江戸の菊細工は一などと、あなた方の前で物識りぶるわけではありませんが、文化九年(1812)の秋、巢鴨の菊細工が出来ました。明治以後は殆ど団子坂の一手専売のようになって、菊細工といえば団子坂に決められてしまいましたが、団子坂の植木屋で菊細工を始めたのは、染井よりも四十余年後の安政三年(1856)だと覚えています。…

そこで、このお話は文久元年(1862)の九月、ことしの団子坂は忠臣蔵の菊人形が大評判で繁昌しました。その人形をこしらえたのは、たしか植梅という植木屋であったと思います。ほかの植木屋でも思い思いの人形をこしらえました。その頃の団子坂付近は、坂の両側にこそ町屋がならんでいましたが、裏通りは武家屋敷や寺や畑ばかりで、ふだんは田舎のように寂しい所でしたが、菊人形の繁昌する時節だけは江戸じゅうの人が押し掛けて来るので、たいへんな混雑でした。

…根津から団子坂へかかって来ると、ここらは大へんな混雑、殊にこんにちと違って道幅も狭いのですから、とても騎馬では通られない。そこで、五人は馬から降りて、坂下の空地をさがして五匹の馬を立ち木につないで置きました。

※染井(現、豊島区染井)で菊細工を開始したのは、弘化2年(1845)。

※「植梅」は、団子坂の植木屋、浅井梅次郎のことである。文久元年9月の菊細工番付は、朝倉夢声旧蔵書『観物画譜』(東洋文庫蔵)に残っており、たしかに「忠臣蔵」を団子坂の梅次郎が出品している。綺堂はこの刷り物を目にして執筆したと考えられる。ただし、「植梅」という通称は、明治以降にならないと史料に登場しない。

次回予告 第141回暮らしの植物苑観察会 2010年12月4日(土)  
「サザンカの花色と花形を楽しむ」 箱田 直紀(恵泉女学園大学名誉教授)  
13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要